

ここは地球のまん中なのだ

園長 児嶋 草次郎

まだまだ猛暑が続いていますが、外ではツクツクボーシが「秋だ秋だ！」鳴き始めており、気分的には、「夏の思い出」的な感覚になって来ております。

今日は、午前中、男児はピーナツの収穫と秋野菜の仮植をし、女兒たちはナスの支柱の補強と、大根・人参の種播きをしました。私も種播きを一緒にしましたが、ほんとうに暑く(おそらく35度を越えている)、汗をダラダラとかきました。これから11月23日の収穫感謝祭に向けて、みんなで野菜作りがんばらなければなりません。

そう言えば、今朝の読売新聞(9月6日付)で、若山牧水生誕140年ということで、「若山牧水全歌集」が50年ぶりに、歌人の伊藤一彦先生の編集で刊行されたと報じていました。

その記事の中で、その「あくがれ」(憧れ)の先に牧水が求めたものこそ、「自然の調和であり、さらには他者とのつながりや共同性だった」と伊藤先生はいうという言葉に目がとまり、しばらくボーとイメージの世界に没入してしまいました。夏の思い出とも融合してしまい、楽しい空想の一時となりました。

『これって、石井十次と一緒にじゃない?表現方法が違うだけじゃないの?』

このところ8月24日(日)の石井十次セミナーで学んだことを繰返し反芻して来ているのですが、たどりついたところは、やはり、石井十次は突然変異ではない、この宮崎の自然と歴史、そして精神文化が生み出した一つの結晶体だったということ。

この夏、初めて「高鍋バンド」という言葉を使いました。笑い者になることを覚悟して、石井十次研究者である安東邦昭氏にその存在について検証してみたいと提案してみましたら、安東氏はすんなりと、「高鍋バンドから茶臼原憲法へ—石井十次の青春—」という題で研究発表をしてくださったのです。

「高鍋バンドは充分に成立する」と言ってくださったことに感謝です。しかし、これで結論が出たとはもちろん思ってはいません。私は、これは高鍋町民に対する“挑戦”だと、挨拶の中で参加した方々を挑発しました。これは検証の始まりだと感じたからです。喧嘩がくがく、色んな意見が湧き出していくことを期待しています。私は歴史研究にそう興味を持っているわけでもないし、その能力もありませんので、傍観するしかありません。

『石井十次の源流にたどりつきたいだけです。』

「高鍋バンド」のバンドとは、一団とか群れと訳します。大いなる志を持った若きクリスチャンたちの群れと言ってもよいでしょう。先月の「友愛通信」でも書きましたが、一番有名なのが「熊本バンド」です。明治の初めにできた「熊本洋学校」が閉鎖され、その生徒たちが群れをなして開校間もない同志社に移ります。同志社の宣教師たちは、彼らのことを「熊本バンド」と呼んだとか。

講師の安東氏は、他に横浜バンド、静岡バンド、札幌バンド等を紹介されました。私が言いたいのは、高鍋にもそのような志の高い若者集団がいて、その集団のエネルギーが石井十次を生み出していったのではないかということ。当時キリスト教を西洋の進んだ思想ととらえる風潮もあったわけで、みんながみんなクリスチャンになったわけではありません。そういう思想を積極的に受け入れ自分の栄養としようとする

る受容的な精神文化が高鍋にあったのでしょうか。精神文化とは、1000年前高鍋に拠点を置いた土持氏時代から、伊東、薩摩、秋月と長い時を重ねて醸成されていったものなのでしょう。

安東氏は、高鍋バンドの先人として明倫堂に学び維新政府に出仕した、三好退蔵をあげています。1845年生れですから石井十次より20年年上。明治15年には伊藤博文の欧州への憲法調査団に司法官として随行し、ドイツで洗礼を受けました。後に大審院院長にも就き、退職後弁護士として活躍。石井十次も支援を受けています。

石井十次少年を医学の道へ導いたのは、高鍋出身の荻原百平医師（1856年生）ですが、荻原氏は、鹿児島島の英国人医師W・ウイルスの開設した医学校で学んでいます。荻原氏は正式なクリスチャンにはならなかったものの、キリスト教への造詣（ぞうけい）深く、石井十次に岡山へ出たら、金森通倫のいる岡山基督教会を訪ねるように指示したとか。

講師の安東氏のレジメを見ていると、明治11年（1878）、「林武一と荻原百平が堤長発邸で初めて高鍋キリスト教伝道行（岩村真鉄参列）」とあります。また、次の明治12年（1879）には、6月に新島襄と小崎弘道が宮崎伝道し、小崎は林武一と高鍋秋月左都夫邸で伝道集会開く。」ともあります。石井十次は、まだ13歳14歳の頃で、生意気盛りでした。

林武一は、横浜バンドのヘボンに医学を学びW・ウイルスの医学校開設に参画、そこで荻原とは交流が生まれたのでしょうか。私がここで注目したいのは、「堤長発（つつみながあき）」と言う名前です。石井十次少年が藩校明倫堂に通っていた時の恩師です。宮崎県の設置にともない「宮崎学校」が新設されると、そちらへ招聘（へい）され、この先生を追っかけて宮崎学校へ転校、東京の攻玉社に入学する時は保証人にまでなってもらっています。師弟関係は終生続きました。

秋月左都夫は、一時期鹿児島島の医学校に学んだこともありましたが、林や荻原とは旧知の仲でしょう。外交官となり後に読売新聞社長も務めています。鈴木馬左也の兄でもあります。鈴木馬左也と言えば、住友の総理事となり財界で活躍しています。もちろん石井十次を支援しています。

つまり、石井十次の少年時代から、高鍋の志高き青年たちはほぼつながっているのです。石井十次が孤児教育事業をやり始めても、こういう方々が陰に日に支援し続けました。

石井十次が岡山孤児院を開設した初期の頃、岡山であるのに職員に高鍋出身者がけっこう多いことが気になっていました。石井十次の周辺に同志社や神戸女学院等へ進学する若者が多いことも不思議に思っていました。石井十次個人の魅力だけではなく、高鍋の青年たちの志が融合し合っただけで一つのエネルギーとなっていたのでしょうか。私は石井十次のことしか知りませんが、そのエネルギーを自らのものとしながら、ある者は実業界へ、またある者は政界等へと進出していったわけです。私としては、「高鍋バンド」という言葉を使ってその魂の源流をまとめたいのです。

『高鍋バンドは、青年たちの魂を束ねるもの。』

石井十次資料館に明治20年1月22日、京都寺町の写真館で取った写真が残されています。5人の若者が写っており、その一人が長髪の石井十次です。まだ21歳の医学生です。あとの4人は高鍋出身の渡辺栄太郎（同志社）、岩崎重怡（じゅたい 同志社）、泥谷愛（同志社京都看病婦学校）、坂田郁（同志社女学校）。皆、十次青年を圧倒せんばかりの迫力を有しています。

それから10年後明治30年6月13日、高鍋教会前で写っている青年たちの写真も残っており、そのエネルギーに触れたいという思いで、友愛社の応接室に飾っています。私に言わせれば、これこそ「高鍋バンド」です。岡山から一時帰省したと思われる石井十次以外に、城重雄、田村寛、岩村真鉄、泥谷新、柿原正次等がやはり勇ましく並んでいます。イスに腰かけた石井十次の前に腰を下した少年は、柿原政一郎であろうと、私はほぼ確信しています。柿原政一郎は石井十次を頼って岡山へ出て、孤児たちと一緒に生

活しながら、六高へ通いました。その間に「高鍋バンド」の一員になっていったのです。

昔、石井十次研究者の細井勇氏（元福岡県立大学教授）が、岡山孤児院関係者で高鍋出身者を調べられたことがあります。その記録から、上記以外に気になっている若者たちの名前を書き並べてみます。

岩村加次郎（岩村真鉄の弟 同志社）、泥谷梅（山陽英知女学校）、森友治（朝晩学校教師）、正富壽（ひさし 同志社）、原よし、重寿兄弟（同志社？）、古藤重光（同志社）、萱嶋諸秀（同志社）、藤田愛二（同志社）。名前は他にも色々あがっていましたが、それらの同志たちの人間関係が高鍋という町でどう紡がれていったのか不明のままです。注目すべきは、女性の志の高さです。今回安東氏の研究でもまだはつきりとはしませんでした。

高鍋の歴史と文化を知る人々によって、一つ一つ解明されて行くしかないのだと思います。ぜひ、若い研究者たちに引き継がれることを期待します。

さて、ここからが重要なところ。石井十次は世界の偉人と言われます。薩摩や長州出身者のように、維新政府側のバックアップもないのに、ほんとに小さな高鍋という町から、明治時代になぜこれだけの人材を輩出できたのか。

先ほど、1000年の歴史と精神文化が、高鍋の若者たちに世界の先進の思想を受け入れようとする土壌を作っていたというようなことを書きましたが、それは、どのようなものなのでしょう。ずっと気になっていることです。

明治17年、医学校1年生の夏休みの時、石井十次は高鍋に帰省するのですが、盆踊りに興じる若者たちに向かって、『踊りを止めて教育に全力を入れようではないか』と叫んで、三味線の棹（さお）を折ったという話が残っています。石井十次を駆り立てて熱くする空気みたいなものを高鍋に帰って来て感じたのでしょうか。

また、明治27年3月には、日記に、帰国途上の所感として、この地方を『理想的人物を養成するにおいて、最も適当のところなり』とも記しています。

熟慮の末そういう言動をしたというよりも、この大地、空気が石井十次にそのようなインスピレーションを働かせたと言った方がよいのかもしれません。靈感、感性の豊かな人物のみに与えられるひらめきと言ってよいでしょう。それはなんなのか。

私は最近、「ここは地球のまん中なのだ」という感性みたいなものが、当時の志の高い若者たちの気持の中に芽生えていったのではないかという気がしています。そういう感性が世界で活躍できるという自信となり、躍動となり、焦燥ともなって、自分たちを突き動かしていったのではないか。それらのエネルギーが、青年たちの中で和となり輪となり環となって共有されるようになっていって、高鍋という小さな町から、各方面に活躍する人材を輩出していったのではないか。

そういう過去を振り返りながら、その歴史・精神文化を今後の子供たちの教育や子育てにどのように生かしていくかが課題となります。

まず、私たち自身が強い故郷への誇りと、こここそが地球の中心地なのだという自覚・プライドで、事に対処していかねばならないでしょう。

高鍋の「友愛の森」事業はそのスタートなのだと言っています。建物は建ちましたが、中味はこれからです。これから一つ一つ具現化していかねばなりません。

最後に、福岡県立大学教授佐野麻由子先生あての礼状をここに勝手に掲載させていただきます。自分自身を鼓舞するためです。逃げ道はありません。前進するしかありません。佐野先生お許しください。

「拝啓 この度は、お忙しい中、石井十次セミナーに御出席いただき、ありがとうございました。おかげ様で、研究者の皆様との交流が、私にとっては充実した一時となりました。

佐野先生にプレゼントしていただいた「南方熊楠」(鶴見和子著)、さっそく拝読させていただきました。あまりにも巨大すぎて近寄りがたいものを感じておりましたが、感性の次元(知的には近寄りがたいまま)で、共感を得るものもあったような気がします。

読みながらアレコレ考えましたが、石井十次と田中等彫刻公園とつながった気がします。根っこ(もしかしたら熊楠風に言えば萃点?)は一緒なのだという直感、インスピレーションです。

「高鍋バンド」の若い青年たちが、世界の中心地なのだという強いプライドで、色んな分野に進出していきましたが、その一人が石井十次でしょう。

現在、色々と枝分かれしてしまっていますが、元をたどれば、萃点(すいてん)にたどりつくのだろうと感じます。

なぜ今私が田中等彫刻公園を作ろうとしているのか。彼はロシア、ウクライナ等20か国ほどの世界各地で彫刻を作って来ています。ここは世界の中心地なのだとアピールするのに、彼の作品ほどよい方法はないでしょう。石井十次も世界の偉人ですが、文字だけのアピール力は弱いのです。

私にとって福祉と芸術との間に壁はなく、石井十次の感性の具現化において、最も良い方法だと感じているのだと、今回気づかされた気がします。

ありがとうございました。

敬具

8月30日